

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 サマセット・モーム 『人間の絆』 上下巻

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 116 回のツイキャス読書会の課題図書は、サマセット・モーム 『人間の絆』 上下巻 です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『ペルシャ絨毯な人生』

人生の意味をペルシャ絨毯とクロンショーが言っていた事をフリップが思い出している所が印象に残りました。

(引用 はじめ)

ちょうど織匠が、あの精巧な模様を織り出して行く時の目的が、ただその審美感を満足させようというだけにあるとすれば、人間もまた人生を、それと同じように生きていいわけだし、また彼の行動一切が、なにか全く彼自身の選択以外のものであるとしか考えられないとすれば、やはり同じように、その人生をもって、単に一片の模様意匠と観ずることもできるはずだ。なにもある行為を、そうしなければならぬ必要もないかわりに、したからといって、別に益もない。(下巻 P.483)

(引用 おわり)

この文章を読んで、人生が無意味だと言った意味が少し分かったような気がして、フリップは救われたんだなと思いました。

私は、ペルシャ絨毯の織匠さんみたいに上等なモノは織り上げられないと思うけど、自分の思うままにコツコツと織り上げていく事が大切な事だと思いました。

この小説の上巻を読んだ時は、全部読む事ができるか不安でしたが、前回ハッピーエンドだという事を教えて頂いて頑張って一応読むことができました。下巻は特に波乱万丈で面白かったですし、最後まで読むことが出来て良かったと思いました。感想文とは関係ないですが、そういう所も読書会の魅力だなと思いました。

私は、本も読んで読まなくても特に利益も損もないかもしれないけど、ただそうしたいから読むだけなのでこれからも読んで行きたいと思いました。そして読書も私の模様の一つになればいいなと思いました。

(おわり)

『人間の絆』 感想文

私が、主人公のフィリップに共鳴しづらかったのは、「老妓抄」でいうところの

—— 混じり気のない没頭した一途な姿 ——

を感じなかったせいだと思います。

一途な性格であれば、プアなデストロイヤー、ミルドレッドに部屋を破壊しつくされても、それを「巨大なショートケーキ問題」と受け止めて、「痴人の愛」を貫いたのだろうか、と思いました。

そんなフィリップと対照的な、アセルニーの長女、サリーが「一本気」な「適齢期」の娘に成長してきます。私は、この二人が絡みはじめる後半が好きです。

サリーはフィリップに気付かれることなしに、彼に思いを寄せるようになります。

この辺あたりからのサリーの、外から垣間見えぬ、一人の娘としての、秘められた心の内を、是非、カナダのノーベル文学賞作家、アリス・マンローのペンで読みたいと思いました。彼女の女性の心理描写は抜群だと思っています。

フィリップはサリーの中に、彼が経験してきたものとは違う、「落ち着いた肯定的なもの」を発見したように思えました。愛の天使であり豊穡の女神(母親に似て多産系だと思います)である成長したサリーの発見は、フィリップに人生の転換を迫るできごとのように思えました。

サリーに妊娠していないことを告げられ、重荷から解放され、選択の自由をサリーから与えられたフィリップは自由意志で、サリーに結婚の申し込みをしたように思えました。

フィリップは、実現することを望まない未来に逃げ込む姿勢から、現在をしっかりと生きることが大事なのだ、という方に変わったように思えました。

これらのことは多分、人生に「生きがい」を見つけたことなのだろう、と思いました。

生活態度も、自分一人の存在だけを考えることから、地域コミュニティの一員として社会貢献する方向に変わっていくように見えます。

そしてこれらは、「人生には意味などない」から「人生の意味は自分が自分自身に与えるもの」に変わったように思えました。

(おわり)

『 完璧な凶柄 』

我が家には、二匹の猫がいる。完全室内飼いなので、彼らにとって、家の中がすべての世界だ。何をしてもない一日を過ごす彼らを見て、こう思うこともあった。「こんなんで、楽しいのかな？」その答えは、フィリップが辿り着いたものと同じような気がした。

両親を早くに亡くし、愛情のない叔父に育てられたフィリップは、足が不自由なこともあり、劣等感に苛まれる。会計事務所、画家志望、医学…と放浪して「何物にもなれない」呪いにかかってしまう。その上、傲慢なミルドレッドに惹かれ、心身共にぼろぼろだ。「人生に意味はあるか？」の問いに取り憑かれるが答えが出ない。

大抵の人間には、ハリウッド映画や小説のようなドラマティックなことは起きない。現実にはドラマティックじゃないから、娯楽にそれを求める。「平凡」という言葉に嫌悪感を抱き、遠ざかろうとする。

だが、クロンショーから人生の意味をペルシャ絨毯に例えられ、悪いスパイラルから脱して、フィリップ自身の幸せをつかむことができた。

(引用始め)

幸福とか、苦痛とか、そんなものは、ほとんど問題ではない。それらは、彼の一生における、いろいろほかの事柄と一緒に、ただ意匠を複雑、精妙にするだけに、入って来るものであり、彼自身は、一瞬間、彼の生活のあらゆる偶然の上にはるかに高く立ったような気持がして、もはや今までのように、それらによって動かされることは、完全にあるまいと思えた。たとえ、どんなことが起ろうと、それは、ただ模様の複雑さを加える動悸が一つ、新しく加わったということにすぎない、いわば一つの芸術品だ。

< 新潮文庫 P.485 >

(引用終わり)

フィリップが辿り着いた答えは「人生に意味などあるものか」。

意味がないのではなく、人生は最初から「完璧な凶柄」なのだと思う。どんな苦難や不本意なことがあろうとも、それは意匠の一部分で、どんな人間の絨毯も完成すれば、一つの「芸術品」なのだ。意味を求めて迷走するよりも、他の人間にはない意匠を織り込んでいる途中なのだと考えるほうが…素敵だ

私が勝手に心配した飼い猫の人生も、きっと完璧なのだ。自由に駆け回ることができる野良猫も餌や外敵の心配のない飼い猫も、同じように完璧で意匠が違うだけなのだ気がついた。だから、あんなに伸び伸びと生きているんだな。逆に、人生の意味を考えてしまう人間のことを可哀想に思っているかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「トラファルガー・スクエア」

(引用はじめ)

昨夜のことが生んだ唯一の影響は、どうやら彼女の中に、彼に対する一種保護者のような気持を起こさせたということらしい。弟や妹たちに対するのと同じように、彼に対しても、いわば本能的な母親の気持を感じているらしい様子だった。(下巻 P.641)

(引用おわり)

『一切の時代を通じて、男性が意志の保持者であり、それに対して女性は人類の知性の保持者である』とはショウペンハウエルの言葉だ。(『自殺について』岩波文庫 P.17) フィリップは、『未来に生きようとする情熱(下巻 P.650)』を吹かしすぎて、幻滅と絶望を繰り返す。それは、彼が意志の人であり、知性の人ではないゆえの悲劇だ。幼くして母を失ったことが、彼の得体の知れない情熱をコントロールする力を奪った。また、蝦足が、自己欺瞞という我が身に刺さる棘のへ内省力の発達を促し、フィリップの感受性を過敏にした。

フィリップは、光源氏のように、無意識に母への憧憬をこじらせている。それが彼の意志の空回りに表れている。恋も仕事も中途半端で、幻滅と失望の泥沼をのたうち回るのは、母への憧憬ゆえなのかもしれない。心の平和を見つけれない、他人にそれを求めても失望する。ショウペンハウエルの『ヤマアラシのジレンマ』である。ミルドレッドを憎しみながら強くひかれるのは、そのせいだ。

帰る場所のないホームレス同然の彼を心配してくれたアセルニー一家こそ、唯一の救いだった。サリーとミセス・アセルニーという人類の知性に保持者の女性の網にかからなければ、フィリップみみたいな取扱注意のこじらせ男は、始末に負えない。『母性的姉妹的な』(p644) 家族愛の厚みによって、彼の自己欺瞞の棘だらけの魂は、居場所を見つけた。

トラファルガー・スクエアは、ナポレオンからイギリスを救ったネルソン提督のトラファルガーの海戦の勝利(1805年)を記念してつくられた。最終部(下巻.659)にて、この広場でフィリップは、ミルドレッドに似た女性を追いかけ、サリーにプロポーズする。村上春樹の『国境の南 太陽の西』で主人公が元カノであるイズミの幽霊と島本さんの混合物を追いかけるシーンのような感じだ。最終シーンに、この広場の夕暮れが選ばれたのは、意志と、人類の知性との調和に対するイギリス人の歴史的な表現なのかもしれない。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343